沈黙の杜に聳えたついいましまりをいる 穹蒼高く夜は深く

北斗の冴に君見ずやほくと 「吾が若人よ汝が野心 の梢指すところ

われにかも似て崇くあれ」

四

荒ぶ吹雪のもだすとき

皎たる天地塵絶えて 六片の花咲くところ

身を練り魂を磨かずや」 塞つる力を君よ知れ | 吾が若人よ北の曠野に

> 自じゅう 春の息吹に渡り行くはるいぶきょうたり 楡の若葉に陽はこぼる にれ たかば ひ 時鐘の響に君よ聴けかねのびきをあるき 「吾が若人よ石狩は [の郷土ぞ幸多き」

十ついち 美しき国の自治の家に 百鳥歌ひ花は笑む の春今日来る

など 嬴 ざる事あらん

住家よ永に栄あれ」 祝歌たかく君歌へ 「迪に恵ふ若人の

谷に 間ま の百合の香のゆらぎ

五.

真理を求むる一百の 崇きのぞみを星に懸け たか

吾若き力強ければ 健児が行手遠けれど 鐘に自由を学びつつかね じゅう まな 贏む秋は近からむ